

日本型教育の海外展開官民協働プラットフォーム

ステアリングコミッティ（第13回）

議事要旨

1. 日 時：令和5年11月30日（木）15:30～16:10
2. 場 所：文部科学省12階国際課応接室（対面及びオンライン会議）
3. 議 題：
 - （1）令和4年度の取組について（報告）
 - （2）令和5年度の進め方について（報告）
 - （3）令和6年度の概算要求の状況
 - （4）その他（質疑応答）
4. 出席者：

（委 員）鈴木座長、五十棲委員、江崎委員、大久保委員、亀井委員、北村委員、
手島委員、西澤委員、雪田委員、綿引委員

（文部科学省）渡辺国際統括官、北山国際課長、磯谷課長補佐、生田目海外協力官

（K R C）奥川氏

開会の挨拶

渡辺国際統括官より、開会の挨拶があった。

議題1 令和4年度の取組について（報告）

資料3に基づき、奥川氏より報告があった。

議題2 令和5年度の進め方について（報告）

資料4に基づき、生田目海外協力官より報告があった。

議題3 令和5年度の進め方について（報告）

資料5に基づき、生田目海外協力官より説明があった。

議題3 質疑応答

各委員からの主な質疑や発言は、以下のとおり。

【北村委員】

令和4年度と令和5年度にわたり、EDU-Portニッポンの認知度が高まっており、特にJICA主催が教育協カウィークでの取組が効果的で、教育の国際的な展開においてEDU-Portが当たり前の存在として受け入れられている。ただし、学校関係者や教育委員会においてはまだ認知が進んでおらず、これが今後の課題となる可能性がある。

【大久保委員】

EDU-PortがJICAの教育協カウィークとの連携されていることは、省庁を超えた連携が進んでいるということで高く評価したい。

【亀井委員】

JICAがODA事業を実施する際の相手国との対話においては、日本の教育経験や知見への関心が大変高い。EDU-Portは、日本の持つ知識を海外と結びつけ、教育協力のプラットフォームとして機能しており、今年度も多様なパートナーに協力を頂き、心強い。今後も企業、NGO、アカデミアなどを巻き込みながら取り組んでいきたい。

【西澤委員】

令和4年度のEDU-Portの活動では、相手国側の参加者が倍増と大きな成果を上げており、今後の更なる展開に期待している。他方、日本側の参加者数はわずかながら減少しており、その背景を知りたい。相手国側の参加者が増えることが、日本の教育の国際化と国内の教育の質的向上にどのように寄与するか注目している。

【KRC守屋回答】

令和3年度はコロナ禍の影響により、海外への渡航と事業展開が難しくなり、令和4年度にはコロナの制約が緩和され、海外渡航が可能となったことが、事業に参加した相手側の人数の増加に影響している。日本側の参加人数についても、令和3年度はコロナの制約から海外に出ていけない分が国内での事業に振り替えて実施という事業者が多かったが、令和4年度には海外での活動が再開され、結果的に国内の参加者が減少してしまった。

【大久保委員】

令和5年度の活動において、スクールビジットが日本からだけでなく海外からも多くの参加がある。この傾向に対して、何か特定の意図があるのか、あるいは偶然の結果なのか？

【文科省生田目協力官回答】

EDU-Portプラットフォームに相談いただいたものに対応させていただいている。

【綿引委員】

令和5年度のインド・バンガロールの教育展示会の出展に関し、他国の動向を教えてください。

【KRC奥川回答】

インド・バンガロールでの出展においては、フィンランドやシンガポールは大きなスペースで自国の教育を売り出そう、アピールしようという姿勢が明確だった。日本も今後の展開に向けて取り組むべき課題があると感じた。

【北村委員】

フィンランドやシンガポールは国を挙げてコンサルティング事業まで展開し、パッケージ化された教育政策を提供している。一方、EDU-Portの強みはプロジェクトごとのユニークな取組であり、日本型の特徴はプロジェクトの深いつくり込みにあると感じる。

閉会の挨拶

北山国際課長より、閉会の挨拶があった。

以上